Ⅰ　戦争遺跡・遺構

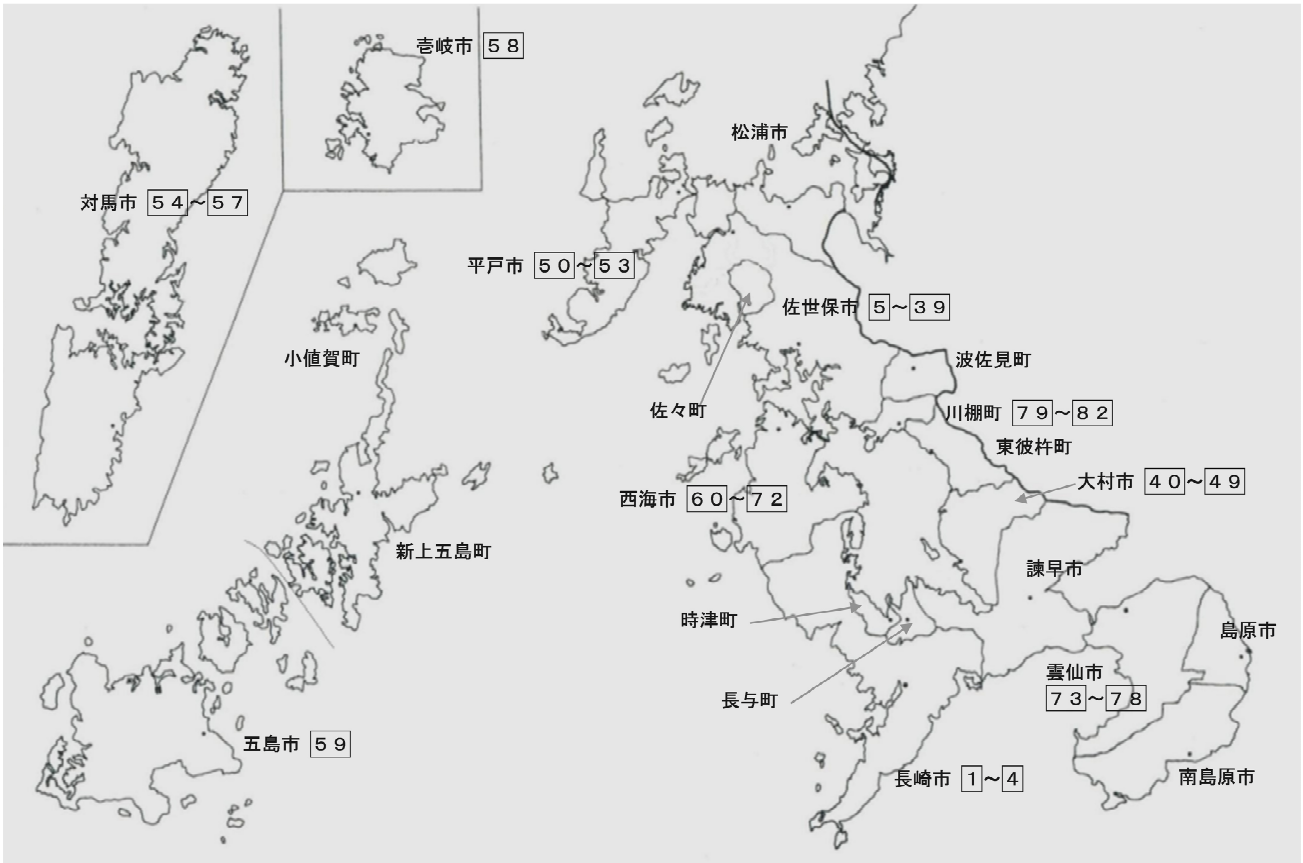
長崎県は朝鮮半島や中国大陸の近くに位置していることから、古くは日清戦争、日露戦争などにおいて重要な軍事拠点としての役割を果たしました。明治22年に佐世保鎮守府が佐世保市に開設され、九州及び四国、沖縄などの西日本地域一帯の防衛と東アジアへの進出拠点となりました。

太平洋戦争においても、昭和16年12月8日の太平洋戦争開戦となった、真珠湾攻撃の「ニイタカヤマノボレ」の攻撃命令が打電されたといわれる針尾無線塔が佐世保市針尾島に今も残っています。そして、戦艦「武蔵」が長崎市の三菱長崎造船所で建造されたことも有名です。大村市には第21海軍航空廠があり、当時、東洋一と言われた戦闘機の製作修理工場や特別攻撃隊の出撃基地である大村海軍航空隊がありました。また、中国大陸や朝鮮半島に近く位置し、海路の要所である東シナ海や対馬海峡に面していることから対馬、壱岐、五島などの離島、西彼半島には外洋に向けた砲台が数多く設置されました。

終戦を迎え佐世保の浦頭港は京都の舞鶴港や広島の呉港などとともに引揚港に指定されました。浦頭港には、昭和23年6月までに中国大陸や南方の戦地から139万人の旧軍人や一般邦人等が復員、引き揚げてきました。浦頭の地は家族の元、郷里に戻る日本上陸の一歩をしるした地であります。

ここにご紹介します戦争遺跡・遺構は現在その跡を残すものを中心に掲載しています。

▽ 戦争遺跡・遺構位置図（市町別の四角囲み数字は次頁以降の戦跡№を表示しています）



「Google マップ」を使用

№ 名 称	1 遠見岳	所 在 地	長崎市琴海大平町遠見岳
参考文献	『琴海町史』(琴海町教育委員会編 1991 年)	問 合 先	長崎市文化財課(TEL095-829-1193)

■ 沿 革　太平洋戦争中の昭和 18 年(1943)初頭、標高 145 メートルを測る遠見岳山頂とその一帯に海軍監視所が置かれた。山中下方に兵舎を建てて兵員 40 名が配置された。戦争激化の中で兵は 10 名に減り、青年学校生徒が補助員として動員された。東側に聴音機や 13 ㎜機銃、北に探照灯、中央に指揮所があった。

■ 施 設　セメントで固めた陣営のみが残存する。

№ 名 称	2 海軍火薬収納庫	所 在 地	長崎市琴海戸根原町
参考文献	『琴海町史』(琴海町教育委員会編 1991 年)	問 合 先	長崎市文化財課(TEL095-829-1193)

■ 沿 革　太平洋戦争中の昭和 19 年(1944)、海軍の火薬疎開地に指定され、谷々に分散して収納された。戦後、占領軍の指示により村民が動員され、入江の小島などで焼却されたという。

■ 施 設　遺構の残存は未確認

「Google マップ」を使用

№ 名 称	3 砲台跡	所 在 地	長崎市伊王島町 1 丁目 真鼻
参考文献	『伊王島町郷土誌』(伊王島町教育委員会編 1972 年)	問 合 先	長崎市文化財課(TEL095-829-1193)

■ 施 設　第二次大戦中に陸軍駐屯部隊が築いたという円形の野砲台跡が残存している。

■ 保 存　遺構は、長崎市指定名勝「伊王島灯台公園」の範囲内に位置している。

№ 名 称	4 野母崎遠見山電探基地	所 在 地	長崎市脇岬町 遠見山
参考文献	『子どもと歩く戦争遺跡III 熊本県南編』2007 年	問 合 先	長崎市文化財課(TEL095-829-1193)

■ 沿 革　雲仙の電探が撤去された後、標高 259 メートルを山頂とする野母崎遠見山に新たに電探基地が設置された。もとは、江戸時代に外国船の来航を監視する遠見番所がおかれていた見晴らしの良い場所である。

■ 施 設　レーダー設置のためのコンクリート製基壇、地下施設等

「Google マップ」を使用

№ 名 称	5 無窮洞	所 在 地	佐世保市城間町 3-2 地先
参考文献	『ふるさと歴史めぐり』2010 市教育委員会	問 合 先	無窮洞顕彰保存会(TEL 0956-56-2003)

■ 沿 革　無窮洞は、太平洋戦争中に旧宮村国民学校(現市立宮小学校)の防空壕として掘られたものである。当時の校長の発案により昭和 18 年(1943)から昭和 20 年(1945)の終戦の日まで掘り続けられた。掘削は教師に指導された高等部の生徒(今の中学生)たちが行い、男子がツルハシで掘り、女子が整形を、下級生が運び出しを担当した。「無窮」とは、きわまりが無く無限という意味がある。

■ 施 設　凝灰岩の岩盤をくりぬいた幅 5m、奥行き 19mの主洞と、幅 3m、奥行き 15mの副洞を中心に書類室や台所、トイレ、非常階段などが設けられている。

■ 保 存　平成 14 年度から公開されており、現在は地元有志により結成された無窮洞顕彰保存会が管理し、見学者に対するガイド活動を行っている。年末年始を除いて午前9時から午後5時まで見学できる。日本遺産構成文化財。

№ 名 称	6 田島岳高射砲台跡	所 在 地	佐世保市小野町(弓張公園)
参考文献	『佐世保海軍警備隊戦闘詳報第 11 号(昭和 20 年 6 月 29 日佐世保方面対空戦闘)』防衛省防衛研究所蔵	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　昭和 13 年(1938) に佐世保軍港防禦のために建設された高射砲台。軍港防禦の要となる高射砲台として装備は順次増強が繰り返され、最終的には最新式の高角砲と射撃用レーダーを備えていた。昭和 20 年(1945)6 月の佐世保空襲の際には 139 発を発射し、8 機撃破を報告している。

■ 施 設　鉄筋コンクリートで造られた砲座 2 基と、野外ステージに改造されたレーダー跡、煉瓦造りの弾薬庫などが残っている。砲座には当時世界有数の性能を誇った 98 式 10 ㎝連装高角砲が装備され、国内で初めて装備された 41 号レーダーによる射撃指揮が行われていた。

■ 保 存　昭和 37 年(1962)に一帯が弓張公園として整備され、現在に至っている。日本遺産構成文化財であり電探跡、砲座跡、弾薬庫跡、指揮所跡等に説明板が整備されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	7 戸尾市場	所 在 地	佐世保市戸尾町 125－1 地先
参考文献	『図説佐世保･平戸･松浦･北松の歴史』2010 郷土出版社	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　戸尾市場は通称「とんねる横丁」と呼ばれている。これは戦時中に掘られた防空壕を利用した店舗があるため 、その名が付けられている。防空壕は佐世保市内に無数に掘られ、空襲のたびに多くの市民が避難した。戦後は空襲で家を失った人が、防空壕を住居や店舗として利用するようになった。

■ 施 設　旧戸尾小学校のある台地に少なくとも8基の防空壕が掘りこまれており、かつては奥で連結されていた。 すべて岩盤をくりぬいた素掘りのものである。奥行きの短いものは戦後に掘削されたものと考えられている。

■ 保 存　通称「とんねる横丁」として市民に親しまれており、食料品を中心に衣料品や日用雑貨まで扱う店が並んでおり、現在も防空壕を利用した店舗で営業を続けている。日本遺産構成文化財として説明板が整備されている。

№ 名 称	8 丸出山堡塁砲台観測所跡	所 在 地	佐世保市俵ヶ浦町 3115
参考文献	『続･しらべる戦争遺跡の辞典』2003 柏書房	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　明治 34 年(1901)に建設された陸軍砲台の観測所跡。佐世保湾の入り口に当たる俵ヶ浦半島の先端近くには、軍港防禦のための陸軍砲台が複数建設された。丸出山堡塁砲台はその中でも最大級の砲台であり、24cm 加農砲 4 門、28cm 榴弾砲 4 門を備え、観測所からの情報により射撃を行った。砲台は実戦を経験することなく昭和 11 年(1936)には演習砲台となり、昭和 20 年(1945)の終戦により撤去された。

■ 施 設　御影石と煉瓦によって築かれた掩蔽部の上部に、鋼板で構築された上屋を持つ観測所が置かれている。周囲には周壕をめぐらせており、移動する観測兵が海から見えないよう工夫されていた。

■ 保 存　昭和 30 年(1955)頃に丸出展望所として整備され、現在に至っている。鋼製上屋が現存する観測所は全国的にも極めて珍しく、貴重な存在であり日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	9 高島番岳高射砲台跡	所 在 地	佐世保市高島町 149
参考文献	『佐世保市黒島の文化的景観保存調査報告書』2011 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　高島は、佐世保港の西 6km の海上にある。明治 44 年(1911)には全域が佐世保軍港区域に指定され、昭和 17 年(1942)頃には、高島にも軍港防備のための高射砲台が建設された。高島番岳砲台は佐世保市が初めて空襲を受けた昭和 19 年(1944)7 月以降たびたび敵機に対する砲撃を加え B29 の撃墜も記録している。

■ 施 設　89 式 12.7 センチ連装高角砲 2 基、97 式聴音機、150 センチ探照灯を装備していた。砲座は解体されたが、山頂に聴音機跡や探照灯跡、聴音照射指揮所が良好な状態で保存されており、麓には鉄筋コンクリート造の発電所が残されている。

■ 保 存　番岳山頂は現在公園として整備されており、説明板も設置されている。日本遺産構成文化財。

№ 名 称	10 黒島名切砲台跡	所 在 地	佐世保市黒島町 835-1
参考文献	『佐世保市黒島の文化的景観保存調査報告書』2011 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　黒島は、佐世保港の西 12km の海上にある。明治 44 年(1911)には黒島全域が佐世保軍港区域に指定され、大正時代には軍港防備のための砲台などが建設された。
名切砲台は、終戦直前の昭和 20 年(1945)5 月に本土決戦に備えて建設されたもので、佐世保鎮守府が策定した防備計画によると、黒島の砲台と、対岸の小佐々に配備された特攻艇「震洋」で挟み撃ちにする計画であった。

■ 施 設　御影石とコンクリートで構築された洞窟陣地であり、15.2 センチ砲 1 門、25 ミリ機銃 2 門を備えていた。フェリー乗り場の近くには同時に建設された洞窟式の 27 旧黒島田代砲台発電所跡が残されており、島内には大正時代の砲台建設に伴って建てられた 26 煉瓦建物も残されている。

■ 保 存　黒島は、平成 23 年(2011)9 月に国重要文化的景観に選定されており、名切砲台も文化的景観を構成する要素として保存されている。日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	11 亀山八幡神社焼夷弾痕	所 在 地	佐世保市八幡町 3-3
参考文献	『ふるさと歴史めぐり』2010 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　亀山八幡神社が現在の地に建てられたのは、文永元年(1264)のことと伝えられている。戦国～江戸時代には松浦家の守護神として崇敬を集め、明治 7 年(1874)には村社となった。軍港が設置されてからは武の神様だけに陸海軍の崇敬も深かった。
しかし、1945 年(昭和 20)6 月の佐世保空襲においてほとんどの建物が焼失した。境内にはこの時落下した焼夷弾の弾痕が石段や参道に十数か所確認され、石灯籠の中には火災の熱で表面が剥離してしまったものもある。

■ 保 存　戦後は一時存続が危ぶまれた時期もあったが、民心の復興とともに立ち直り、今では「おくんち」をはじめ諸々の行事も行われ、昔と変わらず市民に親しまれている。

№ 名 称	12 八天岳高射砲台跡	所 在 地	佐世保市里美町国有林
参考文献	『佐世保海軍警備隊戦時日誌』防衛省防衛研究所蔵	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　昭和 13 年(1937)から翌 14 年にかけて佐世保軍港防禦のために建設された高射砲台。佐世保市の最も北東部に位置する八天岳山頂にあり、伊万里方面から進入する敵機の迎撃を企図したものと考えられる。

■ 施 設　10 年式 12 センチ高角砲 4 門を装備していたが、砲座は6田島岳高射砲台跡のようなコンクリート造では無く、周囲に土塁を廻らせる様式であり、4 基が現存している。周囲には探照灯跡や、兵舎跡も確認できる。

■ 保 存　八天岳からオサエ峠に至る九州自然歩道の沿線にあるため、アクセスは比較的容易である。日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	13 旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設	所 在 地	佐世保市針尾中町 382
参考文献	『旧日本海軍針尾送信所学術調査報告書』2011 佐世保市教育委員会	問 合 先	針尾無線塔保存会 （TEL0956-58-2718）

■ 沿 革　日露戦争において、無線通信の重要性を認識した日本海軍により建設された無線電信施設。大正 11 年(1922)に完成した。太平洋戦争の開戦に際しては、「ニイタカヤマノボレ 1208」の暗号をここからも発したといわれているが、それを裏付ける資料は確認されていない。戦後は海上自衛隊と海上保安庁により使用されて、平成 9 年(1997)まで現役の無線施設であった。

■ 施 設　高さ 136mの鉄筋コンクリート造無線塔 3 基、半地下式の電信室、油庫、見張所などが良好な状態で残されている。当時は長波通信が主流であったため、非常に大規模な施設となっている。

■ 保 存　わが国の土木史、電波技術史上重要な施設として国の重要文化財に指定されている。年末年始を除き 9 時～16 時まで見学可能。事前申し込みによりガイド活動も行っている。

№ 名 称	14 旧佐世保鎮守府凱旋記念館	所 在 地	佐世保市平瀬町 2
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997 長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市民文化ホール （TEL0956-25-8192）

■ 沿 革　第一次世界大戦における佐世保鎮守府所属艦艇の活躍を記念するため大正12年（1923）に建設され、海軍における催事や合同葬儀の会場として使用された。戦後は米軍に接収されダンスホールなどとして使用されたが昭和57年（1982）から佐世保市民文化ホールとして市民の文化活動の場として使用されている。

■ 施 設　壁は煉瓦造、内部列柱には鉄筋コンクリートが用いられており、全体的に古典主義的な意匠に統一されている。正面玄関上の碇のレリーフや内部列柱の桜をかたどった金具など記念館にふさわしい装飾性に富んだ建物である。

■ 保 存　国登録有形文化財であり、日本遺産構成文化財でもある。2 階ギャラリーには佐世保市の近代史のパネル展示等を行っている。火曜日、年末年始休館。9 時～22 時まで見学可能（要連絡）。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	15 旧佐世保海軍工廠（佐世保重工業）	所 在 地	佐世保市立神町 1-12
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997 長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 （TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　佐世保重工業株式会社佐世保造船所はかつての佐世保海軍工廠の施設を受け継いで発足した佐世保船舶工業が前身となっている。工場建築の多くは海軍工廠時代の建物を使用している。クレーンが林立する景観は佐世保を象徴する景観として親しまれている。

■ 施 設　弓張岳からよく見える修理艦船繋留場（立神係船池）や SSK バイパスから見える戦艦武蔵を艤装した第４ドック、イギリス製の 250 トン起重機などわが国の土木史上重要な施設が現役で使用されている。

■ 保 存　250 トン起重機、預兵器庫が国登録文化財となっている。また日本遺産構成文化財としての説明板が東門前、第４ドック上バス停付近に設置されている。構内の立ち入りはできない。

№ 名 称	16 旧第五水雷庫と軍需部倉庫群	所 在 地	佐世保市干尽町 5-51
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997 長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 （TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　干尽地区には魚雷、砲弾類を貯蔵するための大型の倉庫が複数建設された。いずれも佐世保軍需部に所属しており佐世保鎮守府に所属する艦艇への補給を担っていた。現在は民間倉庫会社等が利用しており動物の飼料などの倉庫に使われている。

■ 施 設　大正11年（1922）に建設された旧第五水雷庫を筆頭に大正6年（1917）建設の旧第四炸薬弾丸庫、昭和8年（1933）建設の旧兵器倉庫、昭和9年（1934）建設の旧弾丸庫の4棟が特に大きい。また昭和期に建設された木造倉庫が複数現存している。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板を設置し、外観のみ公開している。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	17 立神煉瓦倉庫群	所 在 地	佐世保市立神町
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　現在海上自衛隊佐世保造修補給所立神西倉庫となっている一帯は佐世保鎮守府第一期工事の際に中央の兵器廠で製造した兵器類を受領･保管する「武庫」が置かれていた。

■ 施 設　明治21年 (1888) 完成の弾庫、小銃庫から大正2年 (1912) 完成の弾丸庫まで、9棟の煉瓦造倉庫が残されているが、それぞれの時代に特徴的な倉庫が建てられており煉瓦造から鉄骨煉瓦造への移り変わりが観察できる興味深い倉庫群といえる。

■ 保 存　構内の立ち入りはできないが、沿線の市道から外観のみ見学可能である。日本遺産構成文化財として説明板を設置している。

№ 名 称	18 旧佐世保鎮守府庁跡 (海上自衛隊佐世保地方総監部)	所 在 地	佐世保市平瀬町
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　佐世保鎮守府は、日本の西を守る鎮守府として明治22年 (1889) 7月に開庁した。その管轄は朝鮮半島から南西諸島、台湾にまで及んでいた。戦災により煉瓦造庁舎をはじめ多くの建物が失われた。昭和43年 (1968) には海上自衛隊佐世保地方総監部が移転し、国土防衛の要としての役割を担い続けている。

■ 施 設　昭和期に建設された通信隊庁舎 (システム通信隊庁舎) や気象観測所 (警務隊庁舎)、地下防空指揮所のほか開庁当時の表門などが残されている。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板を設置しており、佐世保観光コンベンション協会が主催するツアーに申し込むことで構内の見学が可能である (令和 4 年 12 月現在)。

「Google マップ」を使用

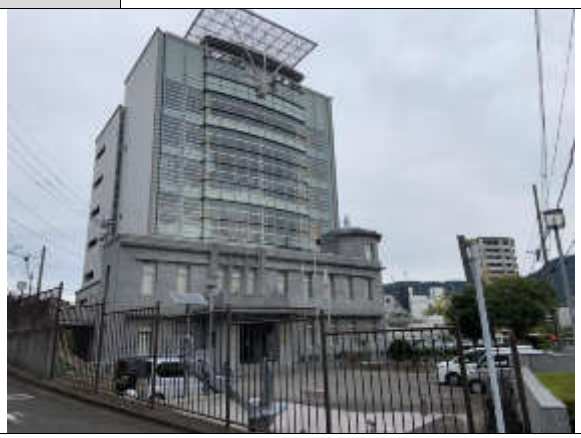
№ 名 称	19 旧佐世保鎮守府防空指揮所跡	所 在 地	佐世保市平瀬町
参考文献	『ふるさと歴史めぐり』2010佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　昭和17年 (1942) 12月に佐世保鎮守府庁舎の地下に完成した大規模な防空指揮所である。佐世保周辺に配置されていた見張所や砲台の動静が地図上に視覚的に表現され、適切な迎撃指揮を行うことができた。

■ 施 設　地下1階には作戦室や空調機械室、水洗トイレなどがあり、地下2階はトンネル状の構造で電信室などに使用されていた。戦後の火災で内装は焼失したが堅牢な地下壕本体は健在である。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板を設置しており、佐世保観光コンベンション協会が主催するツアーに申し込むことで構内の見学が可能である (令和 4 年 12 月現在)。

№ 名 称	20 旧佐世保水交社 (海上自衛隊佐世保史料館)	所 在 地	佐世保市上町8−1
参考文献	-	問 合 先	海上自衛隊佐世保史料館 (TEL0956-22-3040)



■ 沿 革　水交社とは、海軍士官の懇談や外国艦隊士官の接待、艦隊乗組士官の宿泊場として設けられた施設である。佐世保水交社は明治26年 (1893) に谷郷町に設立され、明治31年に現在地に移転新築された。初代は木造の建物だったが、のちに鉄筋コンクリート2階建て (一部3階) の建物に建て替えられた。戦後は米軍に接収され、将校クラブとして使われた。

■ 施 設　旧水交社の建物の一部を保存し、その背後に新館を建設して海軍の歴史や海上自衛隊の活動を展示する海上自衛隊佐世保史料館 (セイルタワー) として活用されている。玄関周りの意匠や八角形の屋根などに水交社時代の面影を残している。

■ 保 存　第 3 木曜日、年末年始休館。9 時 30 分から 17 時まで見学可。日本遺産構成文化財として説明板を設置している。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	21 旧佐世保海兵団跡	所 在 地	佐世保市平瀬町（佐世保公園）
参考文献	『ふるさと歴史めぐり』2010 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課（TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　海兵団とは、主に下士官や水兵の徴募と教育訓練、軍港警備、乗組員の補充を行う組織として、各鎮守府に設置された。佐世保海兵団も鎮守府と同時に開庁し、終戦までの56年間九州・四国・沖縄から選ばれた百数十万の若者を鍛え、育てた。彼らは海軍の根幹を支える戦力として活躍する一方で、スポーツ界でも活躍した。

■ 施 設　現在の佐世保公園とニミッツパークのほとんどは営庭であり各種訓練が行われていた。現在は火薬庫や24第八号兵舎が残っている。

■ 保 存　佐世保公園の一部として常時公開しており、日本遺産構成文化財として説明板を設置している。

№ 名 称	22 旧陸軍佐世保要塞小首堡塁跡	所 在 地	佐世保市俵ヶ浦町 2221
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997 長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課（TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　小首堡塁は佐世保軍港を防備する佐世保要塞に属する砲台として明治 33 年（1900）に築かれた。北側の丸出山堡塁と同じく敵艦との砲戦を想定し 24 cmカノン砲 4 門を主兵装とした。24 cmカノン砲は昭和 12 年（1937）に廃止されたが副兵装の 15 cmカノン砲は残され、昭和 17 年（1942）に撤去されるまで砲台として存続した。

■ 施 設　4 門の 24 cmカノン砲の砲座や弾薬庫、兵員が休息した棲息掩蔽部、便所などが良好な状態で残されている。

■ 保 存　地元有志で整備された「俵ヶ浦歴史遺産トレイル」の一部として公開されており、日本遺産構成文化財として説明板を設置している。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	23 旧佐世保鎮守府長官官舎跡	所 在 地	佐世保市平瀬町（佐世保公園）
参考文献	『旧佐世保海軍鎮守府長官副官官舎調査報告書』1993 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課（TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　佐世保鎮守府の初代長官には、建築委員長を務めた赤松則良中将が引き続いて就任し、以来終戦まで 42 人が鎮守府長官を務めた。鎮守府長官が居住する官舎は、木造 2 階建ての洋風建築で、明治 22 年(1889)8 月に完成した。当初は軍政会議所（軍事裁判所）も兼ねており、隣接して和風一部洋式の副官官舎（平成 5 年：1993 まで現存）も建てられた。

■ 施 設　明治 42 年（1909）に建て替えられ、海側からと市街地側からの眺めが全く異なる豪華な建物となったが、昭和 20 年(1945)6 月の佐世保空襲で焼失してしまった。現在は築山と庭の石灯籠、築地塀を残すのみである。

■ 保 存　佐世保公園の一部として常時公開されており、日本遺産構成文化財として説明板を設置している。

№ 名 称	24 旧佐世保海兵団第八号兵舎（海上自衛隊平瀬庁舎）	所 在 地	佐世保市平瀬町
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997 長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課（TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　昭和 14 年（1939）に完成した鉄骨コンクリート 3 階建ての兵舎である。海兵団は新兵の徴募と育成が重要な任務であり、日本海軍の勢力拡大に伴って海兵団の施設も兵舎を中心に充実が図られ、最終的には 10 棟の兵舎が建てられた。

■ 施 設　モダニズム建築が浸透していた昭和 10 年代らしいシンプルな建物で、兵舎棟にL型に便所棟が附属している。梁や柱を特に太くした耐爆構造を取り入れていることが大きな特徴である。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板を設置しており、佐世保観光コンベンション協会が主催するツアーに申し込むことで構内の見学が可能である（令和 4 年 12 月現在）。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	25 旧田島岳空戦指揮所跡	所 在 地	佐世保市清水町（但馬岳公園）
参考文献	『佐世保鎮守府沿革概要』防衛省防衛研究所蔵	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課（TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　昭和 13 年（1938）に弓張岳の 6 高射砲台と同時に但馬岳に防空指揮所が設置された。防空指揮所からは鎮守府と佐世保航空隊、大村航空隊へ直通電話が引かれ空戦指揮所も兼ねていた。昭和 17 年（1942）に鎮守府地下の防空指揮所が完成すると機能の大半は移転したが、空戦指揮所は残され予備の防空指揮所としての機能もあった。

■ 施 設　入口はふさがれているが地下式の指揮所跡や兵舎跡、機銃座跡等が残されている。

■ 保 存　但馬岳公園の一部として常時公開されており、日本遺産構成文化財として説明板を設置している。

№ 名 称	26 旧黒島東砲台施設	所 在 地	佐世保市黒島町
参考文献	『黒島の自然とキリシタン』1995 日本ナショナルトラスト	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課（TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　明治 44 年（1911）に佐世保軍港区域が拡大され、黒島がその最外郭となった。そのため第一次世界大戦がはじまった大正 3 年（1914）に黒島の古里地区に東砲台、田代地区に南砲台が建設された。昭和 18 年（1943）に廃止され、すべての装備が撤去された。

■ 施 設　東砲台には 8 ㎝カノン砲 2 門と探照灯が装備されており、現在煉瓦造の探照灯格納庫と発電所、管制機雷を起爆する視発所の建物や兵舎跡、桟橋が残されている。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板を設置している 。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	27 旧黒島田代砲台発電所跡	所 在 地	佐世保市黒島町 28
参考文献	『佐世保市黒島の文化的景観保存調査報告書』 2011 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　昭和 20 年 (1945) 5 月に本土決戦に備えて建設された黒島田代砲台に電力を供給するための発電所である。戦後は発電機ごと地元に払い下げられ、島の生活に初めて電気を供給した。発電所には冷却水槽が併設されており、この水を磯で遊んだ子どもたちが水浴びに使っていた。

■ 施 設　鉄筋コンクリート造洞窟式の施設で、入口には爆風除けの壁が設けられている。発電所屋根には排煙のための煉瓦造煙突 3 基も設けられている。

■ 保 存　黒島は、平成 23 年(2011)9 月に国重要文化的景観に選定されており、田代砲台発電所も文化的景観を構成する要素として保存し、公開されている。日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

№ 名 称	28 旧黒島番岳高射砲台跡	所 在 地	佐世保市黒島町
参考文献	『佐世保市黒島の文化的景観保存調査報告書』 2011 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　昭和 12 年 (1937) に佐世保軍港の最外郭を守る高射砲台として建設された。3 年式 8 ㎝高角砲 2 門のほかにドイツ製のヨ式空中聴音機とそれに連動する探照灯が装備されていた。砲台の高角砲は昭和 19 年 (1944) に他所に移設され、代わりに探照灯と管制用レーダーが装備され見張所として運用された。

■ 施 設　番岳の山頂付近に広いすり鉢状の聴音機跡が残されている。山頂へ続く尾根沿いに探照灯跡、山頂に砲座 2 基が残されているが、山林化しておりアクセスは難しい。

■ 保 存　黒島は、平成 23 年(2011)9 月に国重要文化的景観に選定されており、黒島番岳砲台施設も文化的景観を構成する要素として保存し、部分的に公開されている。日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	29 黒島名切突堤	所 在 地	佐世保市黒島町
参考文献	『佐世保市黒島の文化的景観保存調査報告書』2011 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　大正 3 年 (1914) に田代地区に築かれた黒島南砲台への交通用として築かれた。大正 13 年 (1924)に台風によって全壊し、復旧されたものが現在の突堤である。現在は黒島漁港名切地区として漁港施設として使用されている。なお突堤へ下る車道は昭和 32 年 (1957) から 6 年をかけて名切集落の人たちが人力で切り開いたものである。

■ 施 設　全長 49mのうち海岸から 31mを地元の御影石で築き、先端側 18mをコンクリート造として崩壊を防ぐ工夫としている。

■ 保 存　黒島は、平成 23 年(2011)9 月に国重要文化的景観に選定されており、名切突堤も文化的景観を構成する要素として保存し、公開されている。日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

№ 名 称	30 前畑火薬庫第二火薬庫	所 在 地	佐世保市干尽町 6-22
参考文献	-	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

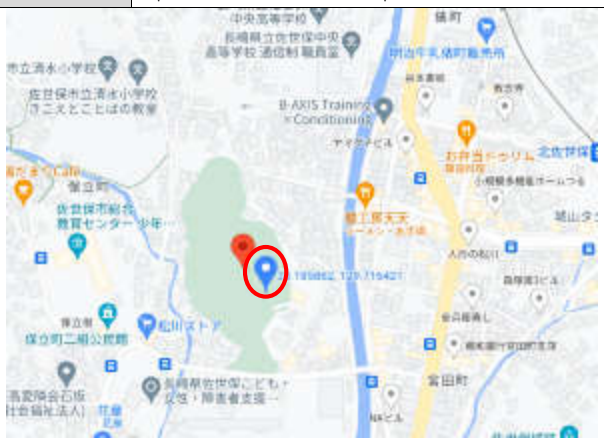
■ 沿 革　明治 21 年 (1888) 5 月に完成した前畑火薬庫創設時の建物であり、佐世保市内最古の煉瓦造建物である。創設当時の前畑火薬庫は二棟の火薬庫で構成されていた。それ以来拡張が繰り返され、現在の形となったのは昭和 15 年 (1940) ごろであった。戦後ほとんどの火薬庫は米軍に提供されていることから、前畑火薬庫の中で唯一間近で見ることができる。

■ 施 設　煉瓦造平屋建ての火薬庫で、現在はトロ箱の工場として使用されている。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	31 旧佐世保要塞砲兵連隊水道施設	所 在 地	佐世保市保立町（保立公園）
参考文献	『佐世保鎮守府初設水道施設等調査報告書』2013 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 （TEL0956-24-1111）



■ 沿 革　明治 33 年（1900）に建設された陸軍佐世保要塞砲兵連隊専用の水道用濾過池である。連隊内で使う水は当初井戸に頼っていたが水質が悪かったため佐世保海軍水道からの分水を受けこの濾過池で浄水した。しかし日量 27 トンに過ぎず、佐世保鎮守府や佐世保市とともに水道施設の建設を政府に求めていくこととなった。

■ 施 設　入口が閉塞されているものの、それ以外の改造は無く保存状態は良好である。アーチ上にはめ込まれている扁額は文字が埋められているものの「浄水池」と書かれているようである。

■ 保 存　濾過池のある丘そのものは戦国時代の城館「鼻繰城跡」であり埋蔵文化財包蔵地として保存されている。また日本遺産構成文化財として説明板を設置している。

№ 名 称	32 神島町の監視哨	所 在 地	佐世保市神島町 99-1
参考文献	-	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 （TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　建設時期は不明だが、他地区の類例や建築様式から航空機の接近を監視する防空監視哨と考えられる。海軍工廠の敷地境界に近く、工廠を一望できる。海側の窓際には赤崎岳の形と「1.5 粁」とチョークで書かれていることから監視のためのものであることは間違いない。

■ 施 設　鉄筋コンクリート造の円筒形の建物で、内径は 1.5m、入口と四方向に覗き孔が設けられている。建設の経緯や具体的な運用方法は不明で、終戦時の引渡目録にも記載されていないなど謎の多い施設である。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	33 金刀比羅神社の監視哨	所 在 地	佐世保市金比良町 2-1
参考文献	-	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　建設時期は不明だが、他地区の類例や建築様式から航空機の接近を監視する防空監視哨と考えられる。海軍工廠の敷地境界に近く、変電所や航海兵器工場を見下ろす場所にある。

■ 施 設　鉄筋コンクリート造の円筒形の建物で、内径は 1m、入口のほかに三方向に覗き孔が設けられている。建設の経緯や具体的な運用方法は不明で、終戦時の引渡目録にも記載されていないなど謎の多い施設である。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

№ 名 称	34 大崎高射砲台跡	所 在 地	佐世保市針尾北町 2157 (大崎公園)
参考文献	-	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

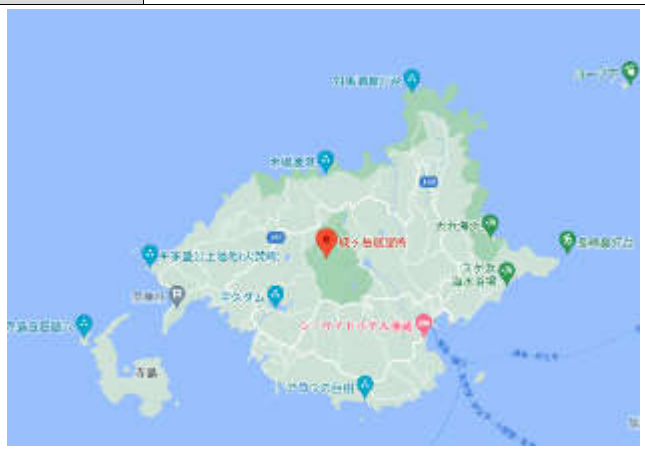
■ 沿 革　昭和 19 年 (1944) 7 月に完成した高射砲台。89 式 12.7 ㎝連装高角砲 2 基を装備していた。眼下の恵比寿湾 (浦頭) に停泊する艦艇を狙った敵機に激しく応戦し、撃墜を記録するなど終戦まで奮戦した。

■ 施 設　砲座跡はグラウンド造成により滅失しているが、水源地 (大崎堤) や弾薬庫、兵舎跡や探照灯跡等の施設が山中に残っている。

■ 保 存　大崎公園として常時公開されており、日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	35 宇久島特設見張所跡	所 在 地	佐世保市宇久町平 801（城ヶ岳展望所）
参考文献	『宇久町郷土誌』2003 宇久町役場	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 （TEL0956-24-1111）



■ 沿 革　五島列島最北端の宇久島の最高峰城ヶ岳の山頂からは周辺海域が広く望めることから、日露戦争の際に特設望楼が置かれるなど要衝の地であった。昭和 12 年（1936）には中国大陸からの敵機を警戒する特設見張所が設置された。昭和 18 年（1943）にはレーダーが装備され見張能力は飛躍的に向上し、太平洋戦争末期に激化した敵機の来襲をことごとく探知した記録がある。

■ 施 設　コンクリート造円形のレーダーの基礎や見張所が敵機の攻撃を受けた際に反撃する自衛用の機銃座 3 基が山頂に残されている。

■ 保 存　西海国立公園の城ヶ岳園地として常時公開されており、日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

№ 名 称	36 馬川兵舎跡	所 在 地	佐世保市俵ヶ浦町 1996
参考文献	『佐世保要塞築城史』国立国会図書館蔵	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 （TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　俵ヶ浦半島に建設された 3 ヶ所の陸軍砲台（丸出山、小首、高後崎）に配備された将校や兵士の宿舎として明治 34 年（1901）頃に建設された兵舎である。各砲台へアクセスしやすい位置に建設された。

■ 施 設　建物は戦後に解体されたが、煉瓦造の門柱、井戸、兵舎 3 棟、将校室の基礎などの遺構が残されている。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	37 高後崎砲台跡	所 在 地	佐世保市俵ヶ浦町
参考文献	『佐世保要塞築城史』国立国会図書館蔵	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　明治 31 年 (1898) 12 月に完成した陸軍佐世保要塞最初の砲台である。佐世保湾の内側に設けられていることが特徴で、佐世保湾入口に敷設した機雷を除去しようとする敵艦の活動を妨害することなどが目的だった。昭和 9 年 (1934) に廃止された。

■ 施 設　地下式の砲側庫 (弾薬庫) や棲息掩蔽部、井戸、門柱、機関砲陣地の胸壁などが残されている。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

№ 名 称	38 佐世保要塞司令部跡	所 在 地	佐世保市光月町 (新公園)
参考文献	『佐世保市教育委員会史』1973 佐世保市教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課 (TEL0956-24-1111)

■ 沿 革　佐世保軍港を防備する陸軍佐世保要塞は明治 33 年 (1900) 6 月に司令部が開庁し、正式に発足した。司令部では通常要塞地帯法に基づく写真の検閲や各種許可申請の受付などの事務仕事を行っており司令部として機能するのは戦時のみであった。昭和 11 年 (1936) に長崎要塞との合併に伴い廃庁となった。

■ 施 設　司令部の建物は戦災で焼失し、跡地には昭和 31 年 (1956) に佐世保市で初の公式野球場である佐世保市営野球場が建設された。 野球場移転後の昭和 58 年 (1983) には体育文化館が建設されている。司令部の跡地は大部分が現在の新公園となっている。

■ 保 存　新公園として常時開放されており日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。

「Google マップ」を使用

№ 名 称	39 佐世保鎮守府武庫弾薬包庫（立神音楽室）	所 在 地	佐世保市立神町 35-36
参考文献	『長崎県の近代化遺産』1997 長崎県教育委員会	問 合 先	佐世保市教育委員会文化財課（TEL0956-24-1111）

■ 沿 革　明治 21 年（1888）11 月に佐世保鎮守府建設第一期工事により完成した弾薬庫である。弾丸と薬莢が一体となった「弾薬包」を保管していた。平屋の建物だが小屋組みを対束小屋組（クイーンポスト・トラス）とすることで屋根裏も収納スペースとして利用していた。

■ 施 設　煉瓦造平屋建ての建物 1 棟が残っているがかつては隣接地にもう1棟同じ建物があった。また敷地の調査では複数の建物跡が確認されており、佐世保鎮守府の建設とその後の変遷を物語る重要な場所といえる。

■ 保 存　日本遺産構成文化財として説明板が設置されている。日本遺産のガイダンス施設として整備を予定しており、令和 7 年度の開業を目指している。

№ 名 称	40 第２１海軍航空廠本部防空壕跡	所 在 地	大村市古賀島町 595-49,50
参考文献	楠のある道から 第２１海軍航空廠の記録	問 合 先	大村市文化振興課(TEL0957-53-4111)

■ 沿 革　第 21 海軍航空廠の本部庁舎前に設置された防空壕の遺構。第 21 海軍航空廠は、昭和 16 年(1941)10 月に佐世保にあった海軍工廠航空機部が移転し開設された。海軍の観測機や戦闘機を製造し、5 万人の工員が就業した。この人口増と、関連施設が当時の大村町のみならず周辺の村にも及んだため、航空廠の設置が、大村町と周辺 5 村が合併し大村市が誕生する契機となっている。

■ 施 設　1,440 ㎡の敷地に地下式防空壕が 1 基残る。

■ 保 存　平成 17 年に市の史跡に指定され、所有者の国から大村市が管理委託を受けて維持管理を行っている。